

アメリカ哲学フォーラム第10回大会 大会企画パネル

テーマ：哲学の実践性を問い直す

日時：2023年11月3日（金・祝）14:30-17:30

会場：信州大学 長野（教育）キャンパス

企画者：高柳充利（信州大学）

趣旨：

今日の教育は、知識を使えるか使えないかの二者択一で判断するようなグローバル経済の論理によって強く駆動されている。科学技術や理系の知識が有用とされるこうした時代において聞かれるのは、哲学・哲学研究に対する、疑義の声・否定の声である。それは例えば、大学においては「哲学は就職活動にどのように使えるのか」という疑問文（であり「大して使えないのならば、学ぶ意味はない」という意見表明）でもって聞かれることもあるだろう。あるいは実業や生活の場においては、「それどころではない」（「哲学のようなものにかかずにあっている暇はない」という否定文として聞かれることもあるかもしれない。そうした疑いの声・かき消す声に対し、「哲学はこのように役に立つ」というグローバル経済の論理に追従する形での申し開きでもなく、「哲学は役に立たない。役に立たないことこそが人文学の美德である」と象牙の塔にこもって旧態たるエリートイズムの態度を維持するのでもない、哲学の実践性をめぐる代替的な応答——生きること、生活することに役立つ哲学のあり方——の筋道を探りたい。「哲学に実践性は必要なのか、だとすればそれはどのような実践性なのか。そのとき哲学という領域はいかに生まれ変わるか。」これが本企画の取り組むべき問いである。そしてこの問いこそが、アメリカ哲学の発祥に起源を辿りうるものであると考える。そこで本企画ではこの問いへの答えを、議論を通じて導きだしていくことを目指す。

そもそもアメリカ哲学フォーラムでは、「立ち上げの趣旨」（2014年6月）においても、「哲学の実践性を問い直し」「多角的に論じる」ことを掲げてきた。第10回大会の大会企画として、上記の問いに向き合う討議の場を実現したい。そこで、次のような三部構成でもって進行する。第I部では、哲学の実践性を多角的に論じるパネリスト3名（社会へ向けての哲学実践に取り組むレイナス研究者、アカデミズムを出て哲学を社会に普及させる企業経営者、平和運動という形で哲学をリアルな政治問題につなぐアメリカ哲学研究者）から、「哲学に実践性は必要なのか、だとすればそれはどのような実践性なのか。そのとき哲学という領域はいかに生まれ変わるか」という、本企画の中心的問いへの答えの鍵となる視点を提起いただく。第II部では、パネリストを含め参加者全体でのフリーディスカッションを行う。第III部では、本企画の対話を経て、哲学に携わる一人ひとりが、そして協働してどのような実践に取り組むか・どのように実践性に向き合うか、ネクストアクションの構想について討議する。こうして哲学の務めをより大きな布置の中で問う中で、アメリカ哲学フォーラムの来るべき務めをも問い直してゆきたい。

アメリカ哲学フォーラム会員やアメリカ哲学の研究者はもちろんのこと、学際的・超学際的な

関心を持つ研究者、さらには企業経営者や医療従事者、学校関係者など、哲学の有用性の可否に関心のある他領域の方々の参加もひろく歓迎したい。本企画が意義のある対話の場を生み出す討議となるよう、会場の座席を車座にしつらえ、参加者の来場を待つ。

パネリスト：

馬場智一氏（長野県立大学）「哲学の居場所」

吉田幸司氏（クロス・フィロソフィーズ株式会社）「哲学コンサルティングの実践と展望——人文系博士の起業事例」

嘉指信雄氏（広島市立大学）「鶴見俊輔が読んだジェイムズとデューイ——思想の“成長的な見方”と人間の“どうしようもなさ”をめぐって」

司会者：齋藤直子氏（京都大学）

進行：全体でおおよそ3時間＝180分（＊時間配分は目安です。）

趣旨説明（15分）：企画者、司会者

第Ⅰ部：パネリストによる発表（60分）：各パネリスト、おひとり20分程度

休憩（10分）

第Ⅱ部：フリーディスカッション（50分）

第Ⅲ部：ネクストアクションについて（45分）

付記：本企画は JSPS 科研費 22K02204 の助成を受けたものです。